

---

# 東方桃球伝

彗龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方桃球伝

### 【Zコード】

Z0116Z

### 【作者名】

彗龍

### 【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公はテンプレどおり能力をもつて東方の世界へ転生するが…。 作者は初心者で一話が短いえ亀更新になるかもしれませんのがよろしくお願ひします。

## プロローグ（前書き）

初心者なので日本語が変な所もあるかもしけないついで、一話一話が  
短いですがよろしければ読んでください。

## プロローグ

「気がつくと俺は真っ白な空間にいた。

どうやら俺は死んだらしい。

目の前にいる爺さんの話を信じればの話だが。

「いやー、すまんかったのう。わしのミスで殺してしまって」

「どうやらこの爺さんは神様らしく、ちょっとしたミスで俺を殺してしまつたらしい。

「というわけで、お前さんをお詫びとして別の世界へ能力つきで転生させたいのじゃが、規則で決まつひとつくじ引きで選ぶことになる。じゃから、この中から選んでほしい」

そいつ言つと、俺の目の前に穴の開いた箱があらわれた。

「この中から選ぶのか。ふむ…これにしてみやう

ひいた紙に書かれていたのは『東方Project』

「東方の世界か、ならば妖怪の体に生まれ変わらせよう。次は能力じゃが、これは漫画などのキャラクターの名前が書いてあり、その者の肉体と能力を与えることになつてある

それはつまり『モンキー・D・ルフィ』とか書かれた紙をひいたらルフィの肉体とゴムゴムの実の能力を得るということか？

「まあ大体そんな感じじゃ。ほれ、次の紙を引かんか

新しい箱が出てきたので、俺は神の言ひとおりくじを引いた。そこに書かれていたのは。

### 『星のカービイ』

「…………」「

重苦しい沈黙が辺りをつつむ。

俺も神もしばらく言葉を発することができなかつた。

「あ～、じゃあ転生の準備を「待てい……なんじや？」

「なになかつたことにして話を進めよつとしている……なんだよ力一ビィつて！－！」

「知らんのか？人気ゲームの主人公じゃが「そういう」とじやない！なぜカービイを入れている！－」

この爺さんはいきなり一頭身になれと言われた人間の気持ちが理解できないのだろうか。

「あ～、同情はするが規則じゃから。あきらめてくれ。それじゃあの

そつ言づと俺の足元に穴があいた。

「ちよひ、まだ話は終わってないぞおおおおつっ！……！」

そして俺は重力に従い落下していく、そこで意識が途切れた。

## プロローグ（後書き）

のんびりとやっていきたいです

## 1話（前書き）

長い話が書けない…

目が覚めると森の中だつた。

起きると自分の目線が異常に低いことに気づく。

「本当にカービィの体になつてゐるし…」

ピンクでつるつるになった自分の手を見て一人落ち込む。

「だが今更文句言つたつてどうしようもないか…」

恨むなら神様じゃなく自分の籠運の悪さを恨むべきだな。

しかし、今はいつの時代で「こにほど」なんだ?」

あたりを見回しながら独り言をつぶやいていると妙な物を見つけた。携帯電話のようだ、拾つてみると着信音が鳴つたので電話にする。

『ねね、つながったよ!』『じゅの』

この声は神か。

「なんの用だ? わざわざ」) なんものを用意して」

いや、問題がないか確認のためじや。なにか問題はないのかの?』

転生先の体が一頭身なのは問題じゃないのか？

「転生先の体が一頭身なのは問題じゃないのか?」

『思ったことそのまま口に出したじゃね？』

『だつてこの体、動いてみるとか「」い違和感をかんじるんだが。

『まあそれはともかく、能力の説明じゃ。その体は「コピーのもとDX」を全コピー能力分持つとの状態じゃから念じれば好きなコピー能力が使えるぞ』

へえ、じゃあちよつと試してみるか…。『ソード』ー。

念じてみると俺の体が一瞬光り、次の瞬間には俺の右手に剣が握られていた。

『それから、そつちの世界で新しくコピーしたものは一度能力を解除すると、もう一度同じものを吸い込まんと使えんくなるから注意するんじゃないぞ』

そこはゲームと同じなのか… わかった。

『それじゃあそろそろお別れじゃの。その携帯はワープスターを呼ぶことができるから大切に持つておくんじゃないぞ』

そう言つと電話が切れた。

全裸なのにどこに持つていればいいのかと思つたが、とりあえず口の中にいれて飲み込んでおいた。

たぶんこれで大丈夫だらう。必要になったときは吐き出せばいい。

「それじゃ、ソードか探索でもするか

護身用に剣を持ちながら俺はその場をさつた。

## 1話（後書き）

「感想をお待ちしています。」

12／3 ハピー能力の名前に『』をつけるように変更しました

どうも、カリビィです。

カービィの肉体に日本人の名前なんて似合わなくね?ということでも、これからはカービィと名乗ります。

さて、俺が現在何をやっているかといふと

「こ、ち、ぐ、ん、な、あ、あ、あ、あ、」

でかい妖怪に追っかけられます。

いや「コピー能力自由に使えるから」といつたって、いきなり出てきたムカデの化け物なんて対処できるわけがない。むこうは俺のふにふにボディが美味そうに見えるのか一向に諦めるつもりがなさそうだ。

(考える、どうすれば逃げ切れる? なにかいじヨビー能力は?)

転生直後に死んじゃった、なんて洒落にならないので必死で考える。

(逃げるには、何かスピードのあるやつ…。そうだー『ジヒット』！)

急いで『ジエット』と念じると、体が光り『ジエット』になる。

(よし、これで飛べば…)

そう思い、ジエットエンジンを起動させ飛ぶ。しかし…

「おふうーぐほおー」

初飛行で細かい操作ができるはずもなく、木々にぶつかりながらその場を逃げた。

「能力の確認をしておこう」

顔をしこたま打ち付けて、ひとまず安全な場所に逃げた俺はそつぶやいた。戦闘能力を考えないとどうにもならない。

まず、俺にできるることを考えてみる。

俺の能力は大きく分けて二つ

・カービィの全コピー能力

・他者の能力のコピー（ゲームやアニメのように一度解除するともう一度コピーしない限り使えなくなる）

その他にも吸い込みやホバリングもおそらくできるだろ？  
しかし、問題は他者のコピーがその場限りだということ。つまり、その辺の能力持ちを吸い込んで俺TRUEEE展開はできない。なので、元々おれが持っている『ソード』などのコピー能力で戦うのがメインになる。だが…

「経験値が足りないんだよな…」

襲われてわかつたが、こきなり敵と戦うなんて無理すぎる。やつさ  
も『ソード』を装備しておいたが相手を前にした瞬間、逃げるしか  
できなかつた。

「やつぱり特訓しかないな」

「のままでは、この森を抜けるどうとか生き残れるかも怪しい。

「まずはこりんな技の練習だな」

いつ襲われても対処できるよう、俺は『ペー』能力を鍛えることに  
した。

## 2話（後書き）

話が全然進まない…

ご感想お待ちしています。

12／3 ポニー能力の名前に『』をつけるように変更しました

## 3話（前書き）

今更ですがWiiのカービィまだやってないんですね。  
買わないと技がよくわからないから小説に出しちらー...

「おおおおつ！ライジングブレイクッ！」

オーラをまとった右腕を相手に向かって振り上げる。狼型の妖怪は、その一撃をくらい動かなくなつた。

どうも、カービィです。あれから数年の特訓の末、ついにこの森では倒せない相手はいなくなりました。

「今晚のおかず、獲つたど～～！」

この妖怪は今からおいしくいただきます。妖怪が食えるのかつて？ ブロックなどあきらかに食べ物でない物ですら吸い込み、飲み込む究極の雑食であるカービィボディをなめないでもらおう。

「調理開始」

俺は『コック』に変身し、調理を始める。数年間の特訓でわかつたのだが、『コピー』能力は技術面や身体能力に影響を及ぼすらしい。『ファイター』や『スーパーレックス』になれば肉体が強化されるし、『ソード』や『カッター』になると素人の俺でも武器の扱いがうまくなる。そして…

「『コック』だと作る飯がうまくなるんだよな～」

鼻歌を歌いながら、『コック』の基本装備である鍋に狼妖怪を入れる。『コック』はアニメと同じように敵をそのまま調理することも、ゲームのように普通の食べ物に変換することもできる。特訓と食事しか娯楽のないこの森の中でずいぶん役に立ってくれた。

妖怪を調理し、食べ終わった後、俺は考えていた。

(そろそろこの森から離れるかな)

ある程度の戦闘能力はついた。今なら旅に出て敵に襲われても遅れをとることはないだろう。

せっかく東方の世界に来たのなら、世界中を回つたり原作キャラに会つてみたい。つてゆうか、この森つて知能の低い妖怪しかいなくて話相手がいなかつたから誰かと話したい。

「よしつ、そうと決まれば早速行動！」

あと何匹か妖怪や獣を狩つて、旅用の保存食を作ろう。そう決めて俺は『ファイター』になり、再び狩りを始めた。

「準備完了」と

次の日、俺は全ての旅支度を整えた。つといつても荷物は食べ物しかなく、その荷物も『バブル』で泡の中に入れて体内に保管してあるから荷物はないに等しい。

「」の森ともお別れか…

目をつぶれば思い出す…、初めて来たときムカデの化け物に追いかけられたこと。初めて生き物をしとめて夜眠れなくなつたこと。前世のことを思い出し一人泣いていたこと。

「…ろくな思い出がねえ…」

少しブルーな気分になりつつ、神からもらつた携帯電話をとりだし操作した。

「そりや初めてワープスター呼ぶな。えーと、このボタンかな?」

適当にボタンを押して待つこと数秒、空の彼方からワープスターが飛んできた。

「よしつ、忘れ物もないし出発だ——つ」

とりあえず適当な方向に行き、人間か知性のある妖怪の集まつている場所を探す。

そう思いながら、俺は森から飛び立つた。

3話（後書き）

"J感想お待ちしております

## 4話（前書き）

作者は歴史とかに非常に弱いので、なにかおかしな部分があるかも  
しません。  
なので間違いがあつたら優しく指摘をしていただけるとありがたい  
です。

「おっ、町が見えてきた。いや建物を見る限り都といったほうがいいか？」

ワープスターで移動して数時間、やつと遠くに人の住んでいそうな場所が見える場所についた。さすがにこのまま町に入るわけにもいかないので、住民に見つからないよう離れた場所に着陸する。

「さて、どうやって忍び込むか…」

人のいる所に行きたいとは思っていたが、よくよく考えればこの姿で人前にでるわけにはいかない。絶対に妖怪と思われるだろう。

「人目につきにくくなると『//ママム』だな」

そつと決まればすぐ実行。都まで人目につかないよう走って近づき、『//ママム』で小さくなつて都に侵入した。

ふう、なんとか侵入成功だ…。

途中で猫に追いかけられたときはあせつたが、なんとか逃げ切れた…。

さて、いろいろと人の噂話を盗み聞きしたところ、なにやら絶世の

美女がいるだの五つの難題だのこう話で持ちきりだった。

これはおやじく輝夜のことだらうと想つ。

つまり俺は平安時代に飛ばされたところとなる。ずいぶん昔に飛ばされたものだ。

(東方の世界に来て数年、ようやく原作キャラに近づけたな……)

このチャンスは絶対に無駄にはしない、ぜひ絶世の美女と暉のかぐや姫を一目見るだけでもせねば。そう思いつつ俺はその場を後にした。

移動中また猫に見つかって追いかけられたのは、お約束といつものだろうか…。

夜、人通りが少なくなった時間、俺は都のなかでひときわでかい屋敷に侵入しようとしていた。噂話だけで屋敷を特定するのは骨が折

れたが、おやじりへいじだらうとあたりをつける」とができた。

「さて、潜入といきますか」

ちなみに今の俺の姿は、潜入が得意そつだと思ひ『ニンジャ』にしてある。

…ふう、潜入成功だ…。見張りがいるが、ただでさえ体の小さい俺が足音をたてず人目につかないよう動いてるせいか氣づく気配がない。そのまま天井裏に忍び込み、そこから輝夜をさがすことにした。

「…しかし今の状況をよくよく考へると、俺つて犯罪者?」

深夜、女性の顔を見るために屋敷に侵入する。人の姿だと見つかっては通報されてもおかしくないレベルだ。

「…まつ、妖怪に法律なんて通用しないってことで

多少の罪悪感をのこしつつ、俺は輝夜探しに集中した。

「いらっしゃスネーク、目標を発見した」

潜入するとスネーク!」をするのはなぜでしょうかね?

それはさておき、俺はよつやく輝夜を探し当たた。ゲームと現実では顔つきが違うが、はつきりと輝夜だと断言できる。

なぜなら、本物の世の者とは思えないほどに美しいからだ。

(おお、眼福眼福)

つい見とれている内に身を乗り出してしまったのがいけなかつたのだろう。天井の板が壊れ、そこから落ちてしまった。

「ぐほおつー」

「ーーーつ、誰ー？」

しまつた、見つかってしまった。このままでは輝夜が衛兵を呼んでしまいかねん。なんとか「まかさなくては。

「ええーーと…」注文頂いた龍の首の珠でござります」

ウインクをし、笑顔でそう答える。すると輝夜は笑顔になり。

「わあー、素敵ー、といつ」とは私の結婚相手はこの難題を出した相手、大伴御行ね！」

と言つた。よかつた、なんとか「まかせたみたいだ。

「…つて、んなわけないでしょつがああつーーー」

訂正、やつぱり駄目でした。

そう想いながら俺は輝夜に殴られたのであった。

## 4話（後書き）

いつのまにかお気に入りに登録されていぬ…。  
こんな駄文を登録していただき、ありがとうございます。

「で？あなたは何者なの？」

「どうもカービィです。輝夜に捕まっちゃいました。今の俺の状況は、足をつかまれ逆さにぶらさげられて尋問されている状態です。

「へへ…、嬢ちゃん中々良い拳を持っているじゃないか…」

「もう一発いとく？」

「カービィと名乗る小妖怪で、」ぞーします！」

綺麗な笑顔で物騒なことをいつ輝夜に恐怖を感じた俺は、慌てて輝夜の質問に答えた。

「カービィ？カビの妖怪かなにかかしら？」

「！」の愛くるしい姿を見てカビだと…、違つて断じて否…」

なんと失礼な事を言う女だらう。美人だからといって全てが許されるわけではないぞ？

「で？そのカービィがこの屋敷に忍び込んで何の用？」

俺の目的は、街で噂のかぐや姫を一目見ようとしていただけだと告げる。

「へえ～、この私をねえ。で？なにか感想はあるかしら？」

「意外と暴力的なんですね」

HAHAHAと笑いながら叫び声が轟きつづぶん殴ってきた、そういうところが暴力的だといったの。」

「なにか他に叫び声があるでしょ？」

この世の者は思えないほどの美しいとかかへ、と言ひ輝夜に俺は本心を言った。

「そうだな、あんたはとても優しい心を持っている。それだけは確かなことだな」

驚いた様子の輝夜。

「あら、どうしてそんなことが言えるのかしら？」

理由？ そんなの決まってる。なぜならあんたは…

「苦し紛れの俺のボケに律儀にノリツツコミをした。優しくにきまで「忘れなさい」イダダダダ、抓らないでくれ」

顔を赤くしながら俺の頬を抓る輝夜。後で指摘されて恥ずかしがるぐらいなら、最初からやらなければいいのに。

「はあ、あんたと話してると疲れるわね。もういいわ、今日のところは帰りなさい」

あんた害はなされうだし、と俺を解放する輝夜。

「そんな！せつかく友達になれたのに…？」

「こいつ友達になつたのよ…私、あなたに暴力しかふるつてないんだけど…」

疲れた様子で輝夜は言つ。一緒に馬鹿騒ぎしたら、だいたい友達だとおもうナゾなあ。

「別に一度と来るなつて言つてるわけじゃないわ、今日のところはつて言つたでしょ。あなたといふと暇をつぶせそうだし、またこじへ来なさい」

今日はもう疲れたから寝るわ、と輝夜は言つた。これはまさか…

「最初のシンからちょっとだけテレ期に入っ!? オリ主らしく、フラグを建てる」とに成功したのか?」

「あなたの言つてる」とはよく理解できないけど、これだけはなんなく言つておくわ、違つ!」

なこはともあれ、この世界に来て初めての友達ができました。

## 5話（後書き）

「J感想お待ちしております。」

## 6話（前書き）

最近ネタが尽きてきたので、更新が遅くなるかもしれません。  
ご了承ください。

輝夜と出会つて数日が過ぎた。あれからいろいろあった。結局五つの難題をクリアした人が出なかつたり。俺が人に見つかりそうになつたので慌てて『ストーン』でマツチヨな石像に変身し、それを輝夜が必死にごまかしたり。それが原因で輝夜に殴られたり。そんな楽しい日々を送つていた。

しかし、そんな日々も終わりが近づいていた。

「月に帰る？」

「そ、私も今は月からきたの」

そういうや、かぐや姫つてそんな話だつたな。

「月があ、行つてみたいなあ……」

今度ワープスターで行つてみるか。『銀河に願いを』でも宇宙空間渡つてたし、たぶん大丈夫だろう。

「そんなにいい所でもないわよ」

そつ言つて輝夜はため息をつく。

「帰りたくないのか？」

「ええ、できればね」

「だったら無理に帰らなくていいんじゃないか?」

「ナニは言つても、向ひが黙つちやしないのよね」

なんと、無理矢理さらおつとこつのか。

「だったら俺にまかせろ、俺が追に払つてやるー。」

「無理ね、ただの一妖怪にどうとかできる相手じゃないわ」

えつ、そんなに強いの?

「月の技術がどれだけ進んでいると思つの?ナヒくんの妖怪なんて、あつといつまに蹴散らせるわよ」

そんなに強いのか。そういう一次創作とかでは永琳がやってきて助けてくれるとかだったし、俺の助けなんてなくとも平氣か?

「わかつた、見送りに来るだけにしておくよ」

「そうしきなさい、死にたくないならね」

一応心配だから、ワープスターでこいつ後をつけよう。

いよいよ輝夜が月に帰る日が来た。帝が兵を大勢来させていたが、おそらく御伽噺で語られるとおり、なんの役にも立たないだろう。

「さて、どんなのが来るのやら」

俺は外で見送ることにした。輝夜は竹取の翁達と一緒にいるから輝夜の傍にいることはできない。輝夜を迎えて来る宇宙船を少しどきどきしながら待つ。しかたないじやん、宇宙船は男の子の憧れなんだから。

「むっ、来たか」

突如空が昼のように輝き、宇宙船が姿を現した。兵は次々倒れていき、何人か堪えながら矢を放つたが矢は宇宙船に当たることなく、すべて逸れていった。

「月の技術力ばねえ……」

唖然として見ていると輝夜が出てきて宇宙船に乗り込んだ。

「さて、じつそり後を追うとしますか」

あ…ありのまま今起こったことを話すぜ！俺は輝夜の乗った宇宙船を追いかけていたら、宇宙船が墜落した。何を言つてゐのかわからねーと思うが、俺も何が起きたかわからなかつた…。頭がどうにか

なりそうだった…。

「なんてネタに走ってる場合じゃねーな。輝夜は無事か?」

あつ、下で永琳が輝夜を守りながら円の兵士と戦つてゐるらしい。

じゃあ、加勢にいきますか!

「永琳っ！」

私は銃で撃たれた永琳のもとに駆け寄る。宇宙船は永琳が壊し墜落させたが、それでも生きのびた月の兵士は私たちを逃すまいと何発も銃を撃つてくる。永琳は私を守りながらじゅうまく戦えない、このまま捕まつて月へ連れて行かれるのだろうか、となかば諦めかけていると。

「ワープスターだッ！」

最近できた私の友人が、いつもと違い無駄に濃い顔をし、すごい勢いで兵士達の上に落ちてきた。

## 6話（後書き）

「J感想お待ちしております。」

どうも、カービィです。とりあえずロエオ様っぽくワープスターで特攻してみました。スマブラを思い出して、いつかやつてみたかつたんですね。

「と、いうわけで大丈夫か輝夜！」

「カ、カービィ…? 何でここに…?」

「うむ、大丈夫そうだ。」

「話は後だ、今はこいつらをどうにかしないと」

そう、月人たちは今のスマブラ式ワープスターの特攻で数が減ったが、それでもまだ3人残っている。

「さあ、かかるてこい。俺は逃げも隠れもしないぞ!」

「無理よ! あなたみたいな小妖怪が勝てるわけないでしょ!」

そう俺を止める輝夜。だが男にはやらなければならぬときがある。

「心配するな、俺が追い払つてやるつて言つただろ?。さあ、撃てるもんなら撃つてみろ!」

そつ言つと月人達は一斉に撃つてきた、計画通り!と顔がゆがむのが自分でわかる。

「リフレクトガード……」

俺はすぐに『ミラー』になり、バリアを張った。バリアにあたった銃弾は、撃つた本人の所へ戻つていった。

「ぐわあ！」「ぎゃあ！」と自分の撃つた弾にあたり、悲鳴を上げ銃を落とす月人、今だ！

「くらえ！『スパークスパーク』！」

64に出てきたミックスコピー能力『スパークスパーク』を発動させる。俺を中心にレーダーによつなものが展開され、その中の敵に電撃を食らわせる能力だ。

「「「「「『さやあああああ！』」「」」」

月人達は一人残らず氣絶した。さすが俺、一人も殺すことなく無力化してやつた。

「輝夜、もう無事だ……ぞ……？」

後ろに振り返ると黒焦げになつて倒れている輝夜と永琳。あれ？そいいえばさっきの『スパークスパーク』の時、悲鳴が多くつたようだ。

「…か、輝夜！いつたい誰がこんなひどいことを…」

「あんた以外にいるかあああ！…」

電撃をくらつておいて、すぐにツツコミができる輝夜を俺は心の底

から尊敬した。

「何はともあれ姫様も私も助かったわ、ありがとう。ほら、姫様も」

「そうね、それに関しては礼を言つとくわ。それにしても、あんた見かけによらず強かつたのね」

電撃のダメージからすぐに復活した永琳と輝夜が言つ。不死の体はねえ。

「はつはつは、もつと褒めてもいいんだぞ」

「調子に乗らないの」

その後、氣絶した月人達は復活した永琳がどめを刺していた。正直、元人間の俺からしたら人と同じ姿の相手の命を奪うのは気が引けたが、そこはしようがないだろう。

「で？輝夜達はこれからどうするんだ？」

「さうね、これからどこか月から見つからない場所でも探してみるわ。あんたはどうする？私たちと一緒に来る？」

輝夜にそつと誘われる。それも楽しそうだが…

「いや、俺は一人で旅をするよ。もともとこんな所を見て回るつもりでいたから」

よくよく考えれば、旅に出たつもりなのに輝夜のいた都にしか行ってない。どうせなら、もつとこんな所を自由気ままに見て回りたい。

「そりゃ、残念ね。まあ、あんたがそう決めたならじゅうがないわ」

そう残念そつと輝夜。そんな顔するなよ。

「じゃあ、またいつか会おう」

「ええ、こつかきつと」

「また会える口を楽しみに待ってるわ」

別れの挨拶をすませ俺はワープスターに乗る。さあ、出発だ。俺の気持ちを読み取ったがごとくワープスターが動く。

「じゃあなー！輝夜！永琳！」

そう声をかけながら、俺は地面から離れていった。

俺の旅はまだ始まつたばかりだ！ 完！

「あ、妹紅に会っていない」

他の原作キャラに会い損ねたことに気づいたのは、数日経つてから  
だった。

## 7話（後書き）

一応まだ続きます。  
ご感想お待ちしています。

「いつも、カービィです。あれから数十年経ちますが、なかなか原作キャラに会えません。」

「やっぱり輝夜たちにて行つたほうが良かつたかな…」

そこら辺の妖怪で作ったお弁当を食べながらひとりごごちる。やっぱり一人は寂しいんです。

「仲間がいればなん? 仲間? ？」

まさかとは思つが、ちょっと試してみよう。『ソード』になつて…

「ヘルパー、出で! やあ…」

力を放出する感じで念じてみるとあら不思議。緑の鎧を着た剣士、ブレイドナイトが誕生した。

「こよひしゃあああああつ…仲間來た…これで勝つ…」

お前何と戦つてんだよって? 孤独とか…

「ところわけでお話TIMEだー君名前は? ってブレイドナイトだよね、知ってるのに何妙なこと聞いてるんだろう俺。俺の名前は力一匕つて言うんだ、よろしくな。さつそくだが好きなものの話をしよう。え? お見合いみたいで恥ずかしいって? へへつ、そんなこと言つなよ。やっぱり仲良くなるためにはお互にのことをよく知ら

ないといけないと思つんだよな。俺の好きなことって、どうか趣味は料理かな？作るのも食べるのも大好き！っていうか、それぐらいしか娯楽がないんだよね。ほら、俺って旅してるから友達ができるもすぐ別れることになるし、一日見てすぐに妖怪つてことがばれるから旅先の村とかで人間と仲良くするつてこともできない。だから一人でも食べたり作ったりで楽しめる料理が好きになつたんだ。今度ブレイドナイトの好きな料理作つてあげるから好きな料理教えてよ。ところでブレイドナイトつて名前長くて言いづらいね、あだ名つけても良い？やっぱり名前を縮めてブレイドとかナイトとか？それともブレちゃんつて愛嬌があつたほうがいい？いきなり馴れ馴れしいと思うだらうけど、今まで一人で旅してきたから寂しかつたんだよ。今までどんな時も一人だった、雨の日も風の日も夏の暑い日にも冬の寒い日にも、多くの妖怪に襲われた日も陰陽師に退治されそうになつた日もあつた。ところでこれ最後まで読む人いるのかな？なんてメタ発言はおいといて。とにかく俺はもう一人じやない、君という仲間が増えたのだから。さあ、話し合おう。お互いの好きなもの、嫌いなもの、趣味、特技、好みのタイプにいたるまで。日が暮れるまで、夜が明けるまで、徹底的に話し合つて友情を深めようではないか。…つてさつきから反応がないけど話聞いてる？」

今までの寂しさからようやく解放されると思い少々暴走してしまつたが、どうにも様子がおかしい。ブレイドナイトの反応がないのだ。

「おーい、ブレイドナイトー？」

呼びかけても反応がない。ふむ…どういひだらう。

「聞こえてるなら右手をあげて」

あつ、ちゃんと右手をあげた。こいつの声は聞こえてるみたいだ。  
…なんか嫌な予感がするな。

その後も指示を出したりしてわかつたが、どうやら俺の生み出すヘルパーは自意識がなく、俺の意思通りに動く存在らしい。

「なんだよ、せっかく寂しい一人旅から解放されたと思つたのに…。よく考えたら、やつしないとウイリーに乗るときとか困るもんな…」

自分の思い通りに動かない乗り物なんて、危なくて乗れないもんな。

さつきとは打つて変わつて一気にテンションが下がる。リアルで。こんな体勢になつた。いや、カービィの体だからうつ伏せみたいになつてるけど。せっかく仲間ができたとおもつたのに…。

「…しかたない、ウイリーバイクに乗つて気分を変えよう」

ヘルパーが出せることがわかつただけでも収穫だ。戦闘になつたとき少しほは樂できる。

そう考へながら俺はヘルパーをウイリーに変え、それに乗りその場を後にした。

追伸、ウイリーバイクはなかなか乗り心地がよかつたです。

8話（後書き）

途中の長いセリフめだかボックスのアレを田指したのですが、途中で挫折しました。  
ご感想お待ちしています。

「でも、カービィです。前回出てきたヘルパーですが、指示を出すと後は自動で敵と戦ってくれるので結構重宝しています。

さて、現在の俺ですが。

「おおおーっ、すっげえー！」

大量の向日葵が咲いてる場所に来てます。ワープスターで適当に飛んでたら見つけたので、降りて近づいてみました。東方で大量の向日葵といったら、やっぱりフラー・マスターこと風見幽香さんですねー。

「…見つからないうちに逃げよう」

東方の一次で「うど」と名高い幽香に会つたらどんな目にあつかわかつたもんじやない。こんな危険な場所にいられるか！俺は帰る！

「あら? 誰から逃げるのかしら?」

うわはははははあああー！ ご本人が後ろにいましたあああ、 いつの間にか

やばい！パニクつてマニアックな物真似をしている場合じゃない！

「ボ…ボヨ?」

頼む、この俺の超キュー<sup>ト</sup>な仕種で『まかされてくれ…

「あい、これなつしゃべれなくなつたの? 叩けば直るかしら?」

「すこませんでした——」

俺はあわててスライドティング土下座を行つた。

「人と話してるときに寝転ぶなんていい度胸ね

「いえ、これは土下座ですー。」の体型ではわかりづらいかもしませんが土下座ですー。」

いや、落ち着け! 僕! いくじだひ! といつても俺みたいな弱そうな妖怪興味を示すなんてことは…。

「とこりで、あなたひょっとして最近尊になつてる妖怪かしら?」

「ほこ? なんのことだしう。俺は別に尊になるようなどいそれた妖怪じ… もじ…」

「妖怪を調理して食べる恐ろじこ妖怪が出るって

「あっ、俺だ

「へー、俺つひそんな有名な…じゃないー

「へへ、やつぱつね

興味持つてらっしゃるううう！……やっぱこよ、これ……なんで俺  
「ごまかさなかつたの！？馬鹿なの！？」  
死ぬの！？

「ソラに来たと言うのは、私も食べに来たのかしら?」

「めめめめっそつむいざこません、あなたの様な大妖怪を食べよう  
なんて。そんな恐ろしいこと考えたこともないです。むしろ今すぐ  
ここから逃げ出したいくらいで」

やばこーーめっちゃ満面の笑みで「うちを見てくわーー」

「駄目よ、私はあなたに興味があるもの。妖怪食いの妖怪と恐れられてるあなたにねつ！」

「うおおおおおつーーー！ヘルパー召喚つーーー！」  
そう叫つて幽香は右手に持つた傘を振りぬいてきた。ぎゃーー！かすつた！今かすつたよー？っていうか俺ってどんな噂になつてゐの？

この土壇場で能力が進化したのか、すっぴんの状態からナックルジヨーを生み出した。さすが俺。

「あら？ 使い魔か何かを生み出す能力かしら？ でもこの程度じゃ私を止められないわよ！」

うそーん、ナツクルジヨーが瞬殺されました。さすが大妖怪、ハンパねえ。

「さあ、見せてみなさい。妖怪食いの妖怪の力がどんなものか」

笑顔でこちらが向かってくるのを待つ幽香。もう逃げられない、ワープスターは呼び出すのに少し時間がかかるし、ヘルパーでは足止めにならない。…しかたない。

「出て来い…『マスター・ソード』」

俺は右手に鏡の大迷宮のラスボス戦の装備である『マスター・ソード』を呼び出した。ラスボス戦のコピー能力を使うのは、これが初めてだ。だが、幽香と勝負するには強力なコピー能力でないと駄目だ！

「いくぞおおおつー風見幽香あああつー」

カービィの勇気が幽香を倒すと信じて…！

「J愛読ありがとう」「やれこました！」

9話（後書き）

一応まだ続きます。

ご感想お待ちしております。

## 10話（前書き）

やつとW.i.eのカービィが買えました。  
そのうちパワー能力を出すかもしません。

「いぐぞおおおひー風見幽香あああひー」

そう叫んで俺は相手に『ドリル』のように突っ込む技、『スパイラルソード』を使い特攻した。

絶対幽香なんかに負けたりしない！！

幽香には勝てなかつたよ…

どうも、カービィです。え？早すぎるって？ガチな戦闘は慣れていないんです。今まで倒した妖怪は格下ばっかで、ただの捕食だつたし。『クラッシュ』を使えばいいじゃんって？それでも倒せるかどうかわからないのに、花畠を巻き込んでめちゃくちゃにしかねない技は使えません。もし戦闘不能まで追い込めなかつたら、間違いなく鬻り殺しにされます。

「というわけで、顔が殴られて肛門みたいになつたことだし、そろ見逃してもらえません？」

「あら、女性にそんな下品なこと言つなんて、まだ殴られたいのかしちゃ？」

「めつそうもない、と顔を戾しながら囁く。これ以上変形してたまるか。

「それにしても噂を聞いて少しばかり期待したけれど、あまり強くなかつたわね」

「なんと、昔輝夜に強いとほめられたのに。大妖怪にはこれぐらいじや通用しないとも？」

「異議あり！ わつきはリーチが短いのに接近戦をいどんだ俺が悪かつたんだ。遠距離から攻撃すれば、あんたにも勝て「へえ」……るまではいかなくとも苦戦させられたらいいなあつて……」

「今とんでもない殺氣がきたよー。人間ボディだつたら確実に失禁してたよー。」

「面白そうね。いいわ、チャンスをあげるからもう一度かかつてき

なセー」

よしつー！今度は斬撃を飛ばす波動切りで攻めてみよつ。そう思いながら幽香から離れていく。

「リリーラ辺でいいかな？よしつ、いくぞー！風見幽香ー。」

振り返りながらリリーラ辺の前には激しい光が。

うん、マスタースパークのこと忘れてた。つていうか、チャンスをやるつて言つときながら攻撃の暇もあたえないつてひどくね？

そう思いながら俺は光の奔流に飲み込まれた。

「とこつ」とで、そろそろ行つてもいいですか？幽香さん

「…あなただいぶ頑丈ね…」

黒焦げになり、Mr.ゲーム&ウォッチをロペーしたみたいになつた俺が言つと幽香は呆れながらソフツトした。

「もういいわ、その頑丈さんに免じて許してあげる。なんだかあなたと戦つているとアホらしくなつてくるし」

こんだけボコボコにしとつてその言い草はないんじゅない？怖いか

「言わないけど。

「まあ、また来たくなつたらいつでも来ていいのよ? あなた、いじめるとい面白いし」

妙な氣に入られ方したー!?

「結構です! それではこれで失礼します!」

「ここにいたら命がいくつあつてもたりない、そういう思いながら俺はその場を後にした。」

あの人絶対友達いないよ!

そんなことを考えてたら後ろからマスタースパークが飛んできた。  
あの人エスパー!?

## 10話（後書き）

戦闘シーンを期待してた皆様ごめんなさい。

ご感想お待ちしています。

## 1-1話（前書き）

本格的に書くネタが死きてきた…

亀更新になるかもしません。

いつも、カービィです。前回幽香にひびくやられたので、ちよつと修行をしてみたいと思います。

「とにかく、何すりゃいいんだら…」

修行っぽいことだったらこの世界に来て最初の数年間の特訓だったが、あれは今の体の動かし方やコピー能力の使い方を学ぶために戦いまくつただけだしな…。一番上達したのが、倒した獣や妖怪を調理した『コック』というのが俺の性格を表してゐるよな…。

「ひなつたら、漫画とかからパクつゝ…もとい真似してみよう！」

まずは『ファイター』のパンチの威力を上げるために感謝の正拳突きを一日に一万発だ！

「打倒風見幽香！いくぞーーーっ！」

そのまま俺は祈り、感謝し、打つの動作を何度も繰り返した。

十分後には飽きてやめた。

「はあ…手っ取り早く強くなれないかなあ？」

そんな楽に強くなれたら誰も苦労はしないが、それでも亥いてみる。そして他になにか強くなる方法はないか、考えてみる。

「ナツノいやあ、この前すつぴんの状態でヘルパーを呼び出せたよな」

幽香との戦いを思い出しながら亥づく、ひょっとしてこの体は結構応用が利くんじやないかと。

「試してみるか、ヘルパー召喚！」

俺の呼びかけに応え、ヘルパーが生み出される。

「まだまだ！ヘルパー召喚！」

すると、セツキとは違つヘルパーが召喚された。

「おおー…やつてみたりできるもんだなー…こざとなつたり弾除けになるんじやね？」

ちよつとテンションがあがつてきた。その後も何度もヘルパーを召喚するたびに、同じ種類のヘルパーは呼び出せないことに亥づく。

出せる数には限界があるか、まあ無限に生み出してもしょうがないからいいか。用がないので、すぐにすっぽんビームで消す。

「さて、次は『パー』能力について考えてみるか

64では『パー』能力をミックスすることができた、ドロッヂ団では『ソード』や『ボム』に『アイス』などを混ぜて属性をつけることができた。この体に応用が利くなら他の能力を組み合わせることも可能だと思つ。

「…試して見るか、『ファイター』 + 『トルネイド』…」

某仮面ライダーを参考に考えてみた組み合わせ、身体能力を上げる『ファイター』に風を身に纏つことができる『トルネイド』。

「やつた、できた…」

意外とやつてみたらできるもんだな、次は技をためそつ。

「おおおおおつ…龍巻旋風脚つ…！」

回転しながらの蹴りを放つと、予想通り体が風で加速される。

「やつべ、テンション上がつてきた…」

その後も調子に乗つて風で加速された攻撃を放ちまくる。

最終的に回りあがて氣分が悪くなつた。調子に乗るのをやめようとしておひが。

1-1話（後書き）

我ながらオチがいまいち...  
ご感想お待ちしています。

## 1-2話（前書き）

今回はいつも以上に短いです、「ア、承くださー」。

「いつも、カービィです。前回はコピー能力で実験を行いましたが、今日は神からもらった携帯について調べたいと思います。

まずは、『Hアラライドの機体は出ないのか?』と感想…げふんげふん、ガイアが俺に囁いているのでそれから確かめることにしよう。適当にボタンを押してみると、神が用意してくれてりや良いんだが…。

待つこと数秒、空の彼方からいつもと違う形の物が飛んできた。あの翼の形をした機体は『ウイングスター』か?俺の近くに止まつたので試しに乗つてみる。おお、良い乗り心地だ。

その後も他の機体を呼んでは乗り比べること数回、うつかり木や岩に激突した回数は数十回、ある程度の確認は終わつた。どうやら大体の乗り物系は呼べるらしい。戦艦ハルバードやW・I・Eに出てきたランティア(ただし、ヘルパーと同じように自意識がない)、天かける船ローアも呼べた。何この携帯、後付設定?もとい神が作っただけあって俺よりチートなんですけど…。まあいいや、気にしないでおこう。つていうか、わざわざいろんな機体を用意してくれた神様ありがとう。

携帯が俺より凄いことにへこみつつ次に確認するのは鏡の大迷宮であつた使い方だ。この作品でカービィは4人に分かれ自分自身を呼び出していた。俺も同じことができるなら戦力アップになるんだが…、試してみるか。

ちょっとドキドキしながら携帯をかける。すると鏡が現れ、そこから赤、緑、黄色の俺が出てきた。

「なんという『Dirty deeds done dirt cheap』“いともたやすく行われるえげつない行為”」

別に触れ合っても消滅とかしないよな…。

俺が何人もいるとか気持ち悪いので、自分で呼んでおいてなんなん  
だがすぐに帰つてもらつ。あの3人はどこから来てどこへ帰つてい  
くのだろうか…。なんか考えると怖くなつてきた。

「ま、まあ深く考えなくてよいよな?さて、「ペー能力の実験で  
もしよーっと」

俺は現実逃避気味に他の事を考え始めた。まあ「ペー能力の研究も  
大事だしいいよね?」

## 1-2話（後書き）

だいぶ後付設定がひどい...。でも調べてたらエアライドって結構ネ  
タに使いやすそうなのでこのまま行きます。

ご感想お待ちしております。

## 1-3話（前書き）

お気に入り登録が100件をこえていた…だと?

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます。

「そこのあなた、止まりなさい！」

どうも、カービィです。鼻歌を歌いながら歩いていると、どこからともなく声が聞こえました。

右確認、誰もいない。

左確認、誰もいない。

後ろ確認、やっぱり誰もいない。

「なんだ、幻聴か」

「ちょっと待ちなさい！上よ、上！」

再び歩こうとしたら、また声が聞こえる。しかたなく上を向くとそこには翼の生えた黒髪の少女が、確証はないが見た目的に考えるとこの天狗は射命丸文だろうか？

「天狗？ふむ、白か」

「そりゃ、つて白ってなに？…つて見るなあっ！」

なにが白かも言つてないのに、思いつきドロップキックを食らいました。パツと見えただけだったが、やっぱり白だったか。なにがとは言わないうが。

「それでなにか用かな？白い下着の天狗さん」

「わざわざ口に出すなあああつつ……」

顔を赤くした射命丸（仮）から、またも蹴りを食らひつ俺。このついついボケてしまつ癖、どうにかならないだろつか。

「それでなんの用でしうか？天狗のお姉さ…いちにちかいつ呼ぶのもなんだから、よろしければ名前を伺つても？」

「私？射命丸文よ…つて自己紹介してる場合じやないわね、今すぐここから立ち去りなさい…」

やつぱり射命丸だつたか、（仮）は取つとこひ、となるといつから先は天狗たちの縄張りつてことか。…ん、待てよ？

「人間や大妖怪ならともかく、どうして小妖怪の俺まで立ち入り禁止になるんだ？」

ちょっとした疑問が出てくる、いちいち見た目知性があるかどうかわからない小妖怪まで追つ払つていたらきりがないだろつか。

「あなた、あの噂知らないの？」

噂？なんのことだろつか。

「妖怪を襲つては食べてしまつ妖怪食いの妖怪の噂よ

OK、理解した。つまりは俺が悪いってことだな。

「最近この近くに現れたって噂だから用心してるのよ、あなたみたいのが噂の妖怪だとは思わないけど特徴が一致するから一応ね」

「へへ、なるほどねえ」

「そういうわけだから早く他の場所へ行きなさい。まったく、ただでさえ謎の空飛ぶ船が現れて皆が警戒してるこんな時に手間かけさせて…」

「ごめん、そっちも俺だ。それはともかく言いたいことは理解できた。だがそう言わると意味もなく通りたくなるのが人情つてもんだよな。

「と言うわけで、ここは突破させても」「入るなって言つてんじようがあつ！」「つまあつ！」

さすが後の幻想郷最速、蹴りがまつたく見えなかつた。速い、速すぎるぜ。

「だが速さでは俺も負けてられねえ。行くぞー『ジエット』ー」

「つー姿が変わっ…！」

射命丸が言い終わらないうちに、俺はエンジンを起動させ空を駆けた。

「ヒヤッハーッ！天狗の縄張りに侵入だーっ！」

：5分後

あつさりと侵入者用の罠に引っかかった俺は、後から追いついてきた射命丸と巡回していた天狗に捕まつた。天狗たちの話から察するに、俺はこれから裁判にかけられ処分を下されるそうだ。

「どうしてこうなった」

「自業自得って言葉知ってるかしら？」

表情は笑顔なのに怒りのプレッシャーを放つてくる射命丸。さて、どうやってこの場から逃げ出そうか…。

## 1-3話（後書き）

「J感想お待ちしております。」

## 14話（前書き）

ちょっと展開に無理があるかもしだせんが  
この作品はノリで進んでいるので細かいことは  
気にしないようにしてください。

「いつも、カービィです。前回のあらすじですが天狗に捕まっちゃいました、現在護送中です。

「ほんと、どうしていつなつた」

「あなたが私の忠告を無視するからでしょうが。まったく、すぐ処刑されないだけありがたいと思いません」

近くにいた射命丸が俺にそう告げる。

「ちゅうじく？『チューして告白する』を略した言葉？やつだー、文ちゃんつたら大胆だなあ」

「ああああああつーーむかつくーーにこつマジむかつくううつーー

ちょっとからかっただけで頭をかきむしりながら苛立つ射命丸、カルシウムが足りてないんじゃないかな？

「というわけで、もつと小魚食えよ射命丸」

「なにがというわけよーーあんたぶん殴るわよーー」

まったく俺が出会う女性はぜうしていつも暴力的な人ばかりなんだろうか、わけがわからないよ。

そんなこんなで檻の中に閉じ込められました。侵入者用の牢屋とかがあるらしいけど、俺の体が小さいため隙間から逃げられそうだと

「……」  
「うう、ここで獣を捕獲した際の小さめの檻に入れられた。……す、ぐく、  
獣臭いです……。

「さて、これからどうぞみやがれ……」

正直逃げ出すのは簡単だ、『ソード』とかで檻を壊した後『マイク』  
などの広範囲攻撃をしながら逃げればいい。だが今回は100%俺  
が悪いからなあ……、これ以上迷惑かけるのはちょっと……。

「まつ、なるようになるか」

そつひとりじぢちて俺は眠りについた。

次の日、俺は檻の中に入れられたまま建物の中に連れ込まれた。いや、俺の体型的に縛つても意味ないとはいこそこの扱いひどくね?なんかペットみたいじゃん。

建物の中には俺を捕らえた射命丸と巡回してた天狗、他にも強そうな天狗たち、その中にも一際大物オーラが出ている奴がいる。やべえ、俺みたいな小物の起こした騒動でこんな大物が出るとは……。ちよつと調子に乗りすぎた。

そんなことを考えていると、その大物っぽい爺さんがしゃべりだし

た。

「ではこれより裁判を行つ、被告を！」  
「

その言葉通り俺は運ばれていた、いや檻から出してくれたら自分で歩きますよ？どうせこんだけ囮まれてたら逃げづらう。

「では罪状を読み上げる。被告は昨日注意されたにも関わらず、我らの領地に無断で踏み込んできた。なにか申し開きはあるか？」

「ボコ？」

とりあえず言葉が理解できないふりをしてしまおかしてみる。あ、射命丸が突っ込みたそつこいつを見ている。

「貴様…ふざけてるのか…」

あ、他の天狗から野次が飛んできた、爺さんも少しお怒りの様子。

「まあどんな言い訳をしてもお主のやつたことは我等天狗に歯向かつたこと、小妖怪如きがそんなことをするなど言語道断、判決は死刑じゃ……と言いたいことにじゃが、お主…妖怪食いの妖怪じやうつ？」

「な…、なぜそれを…？」

俺は自分から妖怪食いの妖怪なんて言ったことは一度もない、この爺さん一目見ただけで俺の正体を見破ったと言うのか！？

「桃色の球に手足と顔がついた姿！そんな珍妙な姿した妖怪お主以

外に見たことないわー！」

ですよねー。

あの爺さん…天魔といつらしげ、天魔が言いたい事は俺を見逃してやるということだつた。なんでも妖怪食いの妖怪を処刑しようとしても、抵抗されれば被害がどれだけ出るかわからない。だつたらなかつたことにしてやるから、とつとここを立ち去れとの事だ。まあ確かにいざという時は『クラッショ』なり『マイク』なりを使って脱出するつもりだつたから天魔の判断は正しいものだつただろう。これ以上迷惑かけないんじやなかつたかつて？結局は自分の命が一番ですよ。

それにもしても、ちょっとした悪ふざけがこんな大事になるとは…。少しは自重しよつ。

立ち去るとき、射命丸にすごい殺意のこもつた目で見られた。やべ

え、からかいすぎた…。今後会つとけむ氣をつけてよ。

## 14話（後書き）

次の更新は少し遅れるかもしれません  
ご感想お待ちしております。

いつも、カービィです。ここにいる幽香といい射命丸といい、原作キャラの俺への扱いがひどいと思う。というわけで、優しくしてくれそうな原作キャラを探してみたいと思います。動機が不純？人間なんてそんなもんですよ。

「というわけで、優しそうな星蓮船メンバーに会いにきました」

そこいらへんの妖怪から聞いた噂によるとこの辺なんだがなあ…。ん?  
?あれは…。

ふと見ると妖怪が女性に後ろから襲い掛かろうとしている。田の前で人間が襲われるのは、元人間として見逃せない。

「というわけで、そおい！」

俺は『ファイター』になりスマッシュパンチを妖怪にあてた。ダメージを受けた妖怪は、そのままどこかへ逃げ出した。そこで異変に気づいたのか、女性がこちらへ振り向いた。

「大丈夫ですか？お姉さ…」

女性に声をかけようとしたが、そこで俺の声は止まった。この特徴的な服装と髪、どうみても聖白蓮さんです。助けはいらなかつたですね、っていうかなんという『都合主義』。

「あぶないところを助けていただき、ありがとうございます」

「いや、あなたほどの実力者だつたら別に助けがいらなかつたと思  
いますけど…」

俺たちは今、白蓮の住む寺へ向かつてゐる。白蓮がなにかお礼がし  
たいと言つので、ならば食事をご馳走にならうということで話がつ  
いたからだ。しばらく歩いていると建物が見えてきた。

「あれが私の住む寺です」

「ほう、あれが」

「人に見つかるといけないので、念のため裏から入りましょ」

俺の見た田完全に妖怪だもんな、カービィボディはこうこうとき不  
便だ。

やつ思ひつつ寺へ近づく、そのとき寺から誰かが出てきた。

「あ、姉さん、お帰…ッ」

あの尼さんのような服装、間違いなく雲居一輪だらうな。ってなん  
でこっちを睨んでるんだろう？

「姐さんっ、離れてっ！そいつ妖怪食いだつ！」

ああ、そういう事。そりや警戒するわな。でもこの可愛らしき見た目のせいで妖怪食いと思われないので、よくわかつたな。

「雲山！来てっ！」

雲山呼んだし一輪で間違いねーなー。そーいや作者つて一輪結構好きなんだよなー、じゃー反撃とかできねーなー。

そんなメタな感じで現実逃避を行なっていた俺は、雲山の大きく重い拳をくらった。

## 1-5話（後書き）

次回から更新が遅くなるかもしれません  
ご感想お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0116z/>

---

東方桃球伝

2011年12月20日18時49分発行